「イエスの御手の中にある」

マルコによる福音書１４章３－９節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は、先回に続いて「ベタニアで香油を注がれる」という小見出しのある所です。この有名な物語を、今日は主イエスの出来事を中心にして学んで行きたいと思います。

聖書は、「イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にいて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。」（マルコ１４：３）と始まっています。かつて主イエスに重い皮膚病を治してもらったシモンという人の家に身を寄せておられた主イエスが、弟子たちと共に食卓を囲んでおられたその時、ハプニングは起こりました。突然、一人の女が家に入って来て、持って来た壺を割り、中に入っていた高価なナルドの香油を、すべて主イエスの頭に注いだのです。ナルドの香油とは、インド・ヒマラヤ原産のナルドという植物の根から抽出し精製した香油で、高価な輸入品でした。その使途は、娘たちが恋人に会う時に髪に付けるというような場合と、もう一つは、死者の葬りの時のためでした。その意味では、ここでは「愛と死」が象徴的に示されたと言えます。そして「頭に油注がれる」ということは、主イエスが「メシア・救い主」であることを暗に示しています。

この思いもかけない女の振る舞いに人々はあっけにとられますが、次の瞬間、我に返った人々の中の何人かが、「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は３００デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」と、女を厳しく咎めたのです（同１４：４－５）。「３００デナリオン」とは、ぶどう園の日雇いの年収に相当する大きな額でした。この何人かが口にしたお金の使い方に関する考え方は、私たちの中にもあって、主イエスのためにという事柄であっても、常に打算的にお金の勘定として考えてしまうのです。

しかし、確かに主は、いつも弱者への愛を説かれましたし、「施し」はモーセの律法でも命じていることですから、彼らの言うことにも筋が通っているのです。でも、そんな彼らに対し主イエスは、「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。・・・この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油をそそぎ、埋葬の準備をしてくれた。」（同１４：６－８）と言って、女を擁護されたのです。それは女が打算ではなく、主イエスの一回限りの出来事である葬りの準備のために、持てるものすべてをささげたからでした。

ここで主は、「良いことをしてくれた」「できるかぎりのことをした」と、二度同じ口調で言われています。この場合の「良いこと」とは「カロス」で、倫理的に良いということではなく、神に喜ばれる振る舞いを指しています。女が香油の一部や半分ではなく、全部をささげたことは、神の国に関係しています。４人の漁師の召命の場面でも、彼らは漁に出る時に必要なものすべてを置いて主に従っていますし、逆に「富める青年」の物語もあります。つまりこれは、ヒューマニズム的な＜倫理＞の次元ではなく、＜神の国＞の次元に関する事柄であるということです。女は、この主イエスの受難とその意味を直感的に受け止め、遺体に香油を塗るという埋葬のための準備をしたのでしたが、主と共に神の国の宣教に関わって来た弟子たちには、この時、未だ主の出来事とその意味が理解できていなかったのです。

聖書には、主イエスが大切なことを説かれる時に発せられる「はっきり言っておく（まことにまことに汝らに告ぐ）」との言葉に続けて、「世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」（同１４：９）と、女の行為の重要性を宣言されたことが記されています。これは聖書の中での唯一の主のお褒めの言葉です。

この主の御言葉を今の私たちのこととして考えて見ますと、「この人のしたことも記念として・・・」は無名の一人の女にだけではなく、私たちにも約束された言葉であることに気付かされます。職種を問わず、その全生涯を神にささげる者に対して、主イエスが約束された言葉そのものだと思えるのです。そして福音が宣べ伝えられる所とは、ここです。＜キリストの教会＞です。キリストの証人として彼・彼女のしたことも、主イエスの出来事と共にここで宣べ伝えられて行く・・・それは確かなことに違いありません。無名で主イエスのために働くことの大切さを記したマルコを思い、主の頭に香油を注いだ一人の無名の女弟子を模範として、私たち一人一人も、無名の弟子として主のために働き、歩んで行きたいと願うものです。

（説教要約　羽入田悦子）